

古書古人(1)

朝倉治彦

当館架蔵の紀州藩校旧蔵本

最近、和歌山大学附属図書館から真砂町分館所蔵の紀州藩文庫目録が刊行された。巻頭解題「紀州藩文庫について」を読んで、その蔵書印及び伝来経路を知ることができた。

これを機に、現在当館の蔵書となっている同種の書籍を報告して置きたい。これは、明治8年・9年に東京書籍館が、藩校旧蔵本を文部省を通して県から引きあげた中に含まれているもので、当時の書類中に、関係文書を捜すと、8年9月23日立案の宮城・新川・和歌山・置賜4県の書籍の追加を文部省に提出した文案が残っている。最初の書目は不明であるが、追加は『明德記』以下の27点である。現在、私の実物調査では、82点が判明している。蔵書印は「学習館記」「紀伊国学所印」「紀伊国古学館之印」の3印である。目録巻頭の解説によると、「兵学所」「田丸城文庫之印章」などもある。しかし、これらは、私の知識不足のため、調査が及んでない。この82点は、写本が断然多く、史書が勝っている。史書が多いということは、国学系統の本が多いと解釈すべきかもしれないが、これは蔵書目録を見なければ判断は下せない。漢籍は4点に過ぎない。「学習館記」の蔵書印を持つものは9点で、他は国学所又は

古学館の所蔵である。明敬館の蔵印は、学習館の蔵印と併捺されているのが一点あるのみである。岸本由豆流の旧蔵本が2点、伴直方のが1点あるが、これは、いかなる訳があるのか。長沢伴雄の蔵書印のあるのが1点あるのは、不思議ではない。大学出版の目録中にも、長沢の蔵書は見られる。伴信友の書入識語と目されるものが一点ある。筆蹟はやや弱いので、自筆と断定するのに、少し躊躇を感じる。

古学館の用箋を使用した『続日本後紀索引』があるが、古学館での業績であろう。82点のうち、1点は榊原芳野の遺書中の一つであるから、経路は別で、藩保管本が散佚したうちの一つである。また東京大学へ帝国図書館から貸出したものが3点ある。なお、前記27点の書目中に書名の一致するものが5点あるところから案ずるに、追加分全てが収められたのではないらしい。

足利学校の旧蔵本

彙報欄に記した如く、足利学校遺跡図書館で開催された展示会は、館蔵本以外に、他館所蔵本も併せて展示され、本館からも出品した。長沢規矩也氏の解説目録も、当日頒布されたが、展示本以外に、当館の架蔵本は、なお2点ある。『市隱草堂集』と『延寿類要』とである。

当館に収められた経緯に関する往復文書によると、明治8年9月7日に立

案されており、書目そのものは綴じこまれていないが、101部という数だけは判る。さらに10月4日、追加が行われ、それは書目も綴じこまれている。点数は61部である。この目録中に、当館所蔵書と一致するのは、『経文正宗』『天原從徴』『広弘明集』『永覚和尚禅録外集』『市隠草堂集』の5点である。『市隠草堂集』は、今回の展覧会には出陳されなかった。

はじめ101点、追加61点、合して162点は、悉皆収められなかったことは、数の上で明らかである。書目の判明した61点を、『足利学校遺蹟図書館古書籍分類目録』と照合すると、書名の一致するもの19点であるが、これは、提出をとりけされたものと考えてよからうか。このほかにも、冊数は合わぬが、書名の一致するもの若干がある。

藤村資料瑣事

去年の5月に刊行された『藤村全集』別巻の作品年表は、従来未詳とされていた箇所は、一躍激少したが、若干未だ埋まってない所がある。

明治30年1月と2月との間の、若菜(詩)は未詳となっている。これは『佳友会雑誌』5号に掲載されたものである。発行は30年4月5日。この文学雑誌の創刊は、29年12月5日で、編輯発行人は小山田淑助である。この会の性格ははっきりしないが、早稲田大学系のように思われる。目につく執筆者をあげると、高田早苗、宮崎湖処子、佐々木

信綱、坪内逍遙、山岸荷葉、川田順、国木田独歩などである。独歩の入会記事は3巻に見える。

次に、この年表に見えないものに、雑誌『帝国民』4巻1号(大正10年1月)に掲載の「鍵の開く力と鈎の引く力」がある。これは講演速記であるから、作品とは云えないが、年表を補うものであろう。この講演が、いつ、どこで行なわれたのか、あいにく当館本は前年の12月号を欠いているため、判明しない。『帝国民』は、川合清丸歿後の第2次大道社の機関紙にして、大正7年1月創刊、当館には12年12月号まである。この雑誌については、一時編集者であった森銑三氏の記録に譲ることとしたい。題名はパスカルの語と説明している。ジヨットオの画いた聖フランソワから東洋西洋の違いに結びつけて、鍵と鈎とを比喩的に解釈しようとした講演で、活字では甚だまとまりのない印象を受けるが、芭蕉、良寛、パスカル、季白、陶淵明、トルストイなどをあげて、「ヨーロッパから学ぶのは一節ある。智力的の勇氣を持つ事だ。どういふ事がヨーロッパの特色で現代に処して行くにはすぐでなく一節ある物を自分の物にする、その鈎が欲しい。それがほんたうに欲しいやうである」と結んでいる。彼の当時の執意の一端をうかがわせるかと思われる。

(あさくら・はるひこ：一般参考課主査)